



神道 (二) (大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記 はじめに (二)
見識をもて

もとは「ふることぶみ」と讀まれてゐたかとも思はれる。

古事記編纂の動機は、四〇代天武天皇の修史の御計畫に基くものであることは、その序文に明かであるが、それが出來上つたのは、三十七年を経た四十三代元明天皇(天武天皇の皇太子草壁皇子の妃であつた方)の和銅五年(皇紀一三三二年)の正月二十八日である。元明天皇が太安萬侶に古事記撰進の詔を下されたのが和銅四年の九月十八日であるから僅か四カ月と十日で撰して上納したのである。これは天武天皇が稗田阿禮の二十八歳の時に敕して帝皇の日嗣及先代の舊辭を誦み習はせてゐられたからである。即ち、その序文で見るとやうに、天武天皇は「朕聞く諸家の賈(齋)る所の帝紀及本辭、既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に當りて、其の失を改めざれば、未だ幾年を経ずして、其旨滅びなんとす。斯れ乃ち邦家の經緯、王化の鴻基なり。故れ惟れ帝紀を撰録し、舊辭を討覈し、偽を削り實を定めて後葉に流んと欲すとのたまふ。時に舍人有り。姓は

第 4 號
月 1 回 發行
ひの心を繼ぐ會
〒791-0510
住所:愛媛縣西條市
丹原町丹原 50-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は國家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

稗田名は阿禮、年は是れ二十八、人と爲り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂れば心に勒す。即ち阿禮に敕語して、帝紀の日繼、及び先代の舊辭を誦み習は令めたまひぬ。然れども運移り世異りて、未だ其事を行はざりき。」で見るやうに天武天皇は、諸家に傳へるところの史籍には虚偽や誤傳が多くあり、益々古傳を私に改竄し、或は尾緒を附けて、自家の來歴を飾らんとする傾向にあつたので、今に於て正實なる國史を撰録しておかなければ、幾年を経ずして、正しい旨が滅びるだらうと深く憂へられて、修史の事業を仰せ出されたのであつた。その御計畫には二つあつた。その一つが「古事記」である。

この古事記は、天武天皇御親ら「帝王の日繼」及び「先代の舊辭」を取りまとめ、取捨選擇せられて、舍人稗田阿禮に敕語り傳へ給ひ、之を全部暗誦するやうに御下命になつたのである。文字の充分發達してゐない古は、古語拾遺の巻頭に「蓋し聞く、上古の世、未だ文字有らず、貴賤老少、口々に相傳へ、前言往行、存して忘れず」と有るやうに、所謂「口碑」に依つて残されたので、これはどこの國の古傳も同様であるが、わが國には上古に「語部」と言ふ部族があつて、神代以來の古事を語り傳へる事を職とした。現在でも文字を知らない老人の中に、實に記憶の確かな人を見るが、昔は尙更のことで、文字に頼つてゐる現代人では想像もつかない程の記憶力暗誦力を有していたのである。稗田阿禮はその中でも最も優れてゐた人物であつたのであらう。

天武天皇は、古事記撰録の志を遂げずして崩御なされた。この志を繼がれたのが元明天皇で、同じく序文に「焉こゝに舊辭あやまの誤り忤たがへるを惜み、先紀の謬あやまり錯まがれるを正さむとして、和銅四年九月十八日を以て、臣安萬侶しんやすまろに詔して、稗田阿禮へいたあれが誦む所の敕語の舊辭を撰録して、以て獻上けんじょうせよとのたまへり。」とあるやうに、古傳承こでんしょうを尊重され、安萬侶に命じて、稗田阿禮が、天武天皇の敕命によつて誦み習つた舊辭―即ち前記した天武天皇御親ら取捨整理された古傳承―を撰録せしめられたのである。元明天皇は、稗田阿禮もすでに齢老いて（六十五歳に達してゐたと考へられる）いつ卒するかも知れないことを恐れてゐられたかとも思はれる。かくして博士太安萬侶の努力によつて神書古事記三卷は出來たのである。

（以下次號）

第一章 農の哲學的考察

菅原 兵治

我、何處どこに行くべきか？

南せんと欲するか、將また北せんと欲するか。これがはつきりと定まらずに、汽車に乗つた方がよい、電車に乗つた方がよい、いや自動車じどうしゃを飛ばした方がよい、自轉車じてんしゃを踏んだ方がよいと、乗物の研究だけに血迷つてゐるのが、從來の農村問題研究の状態ではなかつたか。換言すれば、農村指導の方法論的研究には相當熱心に努力して來たが、目的論的研究に缺かけてゐた。經濟的乃至勸奨かんしょうする處ところも、殆んど方便的・功利的で、目先の金になることのみを目的としてなされつつあつた觀がする。かくて一體農村を何處に連れて行くのか。

農村何處どこに行くべきか？

其の根本を確定せずして、唯乗物を飛ばしたただけでは、走れば走る程、目的地より遠ざかつて行くことすらなしとせぬであらう。古人も「本立つて道生ず」といふが、私は本章に於て、先づ農村問題の根本たる目的論的研究を述べることにする。其の爲には少しく難澁なんじゆでもどうしても一通り研究の原理たる陰陽文質の關係を究明するを要する。

歸農の意義 知より信へ（観の轉換）

三浦 夏南

祖國維新といふ大計の基礎を固めるには一族の再建、郷土自治の復活が歴史の必然として求められてゐることはこれまでの月報にて少しく示唆してきた。そしてその出發點が歸農にあり、農といふ根基なくして維新の大望を描くことは、近代人の儂い夢に過ぎぬといふ事實を確認しなければならぬ。それぞれの職に天分があり、各々が自らの役割を全うするところに維新の大業があることは論ずるまでもないが、文に過ぎ、繁榮の内に頽廢しつつある現代社會にあつては、農といふ根本を培養することが急務である。特に竹葉先生の志を繼承し、三間村塾の大業を復活せんとする我々に於ては第一に着手すべきものである。その意義を闡明すべく本號より幾號かに互つて農について考へて行きたい。

一般的には農業は食料生産の一面だけで考へられることが多いが、農の眞意義は多面的且つそれぞれの要素が有機的に働いてをり、生命的である。その活物を一舉に論じ切らうとすれば、當然すべての要素が錯綜し、論點が明確にならない。現實の農はここで論ずる全ての要素が相即一致して人間の現實の営みとなつて居るのであるが、ここでは便宜的に焦點を一つに絞りつつ毎號書き綴つて行く。

萬物が生まれ、生きて行くことは神代より變はらぬ天地の大經である。植物は水と光、そして大地の養分を頂きながらその天命を全うし、動物はその植物の命に育まれ生活を送つてゐる。人もまた食せずしてその生を養うことは不可能である。我々にとつて食とは神々より生まれ出でし命を養うものとしてあり、必然的に食を與える存在に良い意味でも悪い意味でも随順して行くことになる。これは生物の本能であり、水の高い所より低い所へと流れ落ちるが如き自然の攝理である。

古代農本の時代にあつては、人々は土着し、農を營み自然の恵みに生かされて來た。自ら耕し、作物を食する。その食を與えるのは大自然の偉力であ

り、神々の慈愛である。直接自然より食を頂いた人々は生活の實感として神々の神徳を敬つたのである。その生活からは自然に神々に祈り、感謝する祭りが生まれ、その根本的人生觀は隨神を至上のものと觀る。自づから神に頼り、従うのである。

それに對して現代商本の錯誤の時代にあつては、人々は土地を離れて都市に集合し、土に觸れることなく、貨幣による消費の生活を送る。如何に大言壯語を吐かうとも、浮世の沙汰は金次第。先づ金がなければ衣食に事を缺く次第である。ここでは自然と人の間に貨幣による流通が先立ち、自然と人の關係は間接的になる。哲學的には神の偉大、農の恩恵も知り得ようが、生活の實感としては金なくしては生きて行けないと觀る。自づから拜金的となり、金に依存する。

社會の形態が如何にあらうとも、自然が根本で、人の働きがあり、自然の恵みを食して人が生きる事に變はりはないのであるが、生活の實感としては大きな差異があるのである。この微妙な差異が人生觀の大きな差異となり、人生觀の轉換が現實世界の轉換の立脚點である。知ることより信ずることへの飛躍であり、哲學的思辨より生活的信仰への大轉換となる。あまりにも近代都市に染まり過ぎた日本人はどうしてもこの一線を越えなければ、眞の立志をすることは出来ないのではないか。竹葉秀雄先生が青年時代に大きな悟りを開かれたのも農作業に勵まれてゐた時であつたことを考へ合はせて切に思ふのである。

幕末志士の遺文を拜讀し、感じてゐた違和感の居所もここにあるのではないか。理論的には明確に理解してゐても志士達との心の距離が埋まらない。その距離こそ生活的實感の懸隔である。生活に密着した信仰が共有されてゐないから、頭で分かつても肚で飲み込めないのである。理窟は通じても純情は通はない。立志はあらゆる大業の出發點であり、その爲には生活そのものの轉換が必要なのである。

ここで言ふ歸農とは生活そのものが農に歸ることである。今流行りの家庭

菜園ではない。生活そのものを維新せんとする斷行である。これは言ふは易いが行ふは難い。これほどまでに社會が近代化されてゐる中であつては尙更である。さらに生活的實感とは個人の體驗たいけんによる感動と言つた淺いものではない。吉田松陰先生で言へば、吉田家歴代に積み上げられて來た生活とその歴史を背景とした實感である。眞實の意味での歸農は二百年三百年を期さねばならず、その爲には先號にも書いた一族の確立と祖志の繼承が確實に行はなければならない。

實は農は一族確立の基盤であり、家族を結び合はせて行く機縁ともなるのである。家族のむすびと農については次號にて書かうと思ふ。

★活動報告

- ・七月一日(日)、第一回定期総会・第二回近藤美佐子先生を語る会
- ・七月二十四日(火)、勉強會『農士道』を開催。

★今後の豫定

- ・八月二十一日(火) 十九時～二十一時 『農士道』
- 松山市男女共同参畫推進センター☆コムズ三階會議室 一―二
- (住所)愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇)
- ・八月二十八日(火) 十九時～二十一時 『土居清良』
- 松山市男女共同参畫推進センター☆コムズ三階會議室 一―二
- (住所)愛媛縣松山市三番町六丁目四―二〇)

★一燈照隅 萬燈照國

ひの心を繼ぐ會は竹葉秀雄・近藤美佐子兩先生の精神を繼承し、發展させることを目的として生まれた會です。一人の「ひ」の精神が周圍の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが國を照らす「ひ」になることを願ひ、活動を行つてをります。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますやう、宜しく願ひ申し上げます。

年會費

- ・一般會員 三千圓
- ・贊助會員 一萬圓
- ・特別贊助會員 三萬圓
- ・支援會員 一萬圓

